

日本のリ・スキリング停滞の原因は「時間制約」

1日は誰にとっても24時間しかないため、現在の労働時間制度のもとでは、リ・スキリングは構造的に困難
7時間労働＋1時間の「ジブン時間」の制度化により、時間制約の軽減を測ることが重要

理論的背景

- ゲーリー・ベッカーの時間配分理論によれば、人は1日24時間の中で、労働・生活(家事・余暇・休息)・学習を配分する。これらは同じ時間を奪い合う関係(トレードオフ)にある。
- 学習には「時間コスト」が存在。1時間の学習は、休息・余暇・賃金を得る機会の喪失を意味する。
- 長時間労働のもとでは、学習コストが高くなり、人的資本投資は抑制される。

政策的含意

- 日本でリ・スキリングが進まないのは、意欲不足ではなく合理的な選択の結果
- 個人の努力では解決困難であるため、時間制約そのものを緩和する制度改革が重要である

提案:7時間労働＋1時間の「ジブン時間」

- 標準労働時間を7時間に見直し、残り1時間を労働者の希望に応じて使用できる「ジブン時間」として制度化
- 用途は①リ・スキリング②健康投資③家事・育児・介護
- 「ジブン時間」を確保可能な形式での裁量労働制の導入は有効だが、過大な業務負担により形骸化しないよう、業務量の適切な管理が不可欠である

期待される効果

- ①リ・スキリング参加率の上昇②労働生産性の向上③女性・高齢者の労働参加促進